

田原芳

「まさに特殊利害と共同利害とのこの矛盾にもとづいて、共同利害は、個別および全体の現実的な利害からきりはなされて国家としての一つの独立した姿をとる、そしてそれは同時に幻想的な共同性としてである」(ドイツイデオロギー P 四四)

「私有が共同体から解放されることによって、国家は市民社会とならんでそのそとにある一つの特殊な存在となった」(同上 P 九三)

「国家は支配階級の諸個人がかれらの共通利害を主張する形態、そして一時代の市民社会全体が集約されている形態である、だからその結果としてすべて共通な制度は国家によって媒介され一つの政治的な形態をとることになる」(P 九四)

要するにドイツ・イデオロギーにおいてマルクス・エンゲルスが言わんとする国家の本質とは「幻想的な共同性」であるといえる。

マルクスは又その著書「ヘーゲル法哲学批判から」で次の様に述べている、——即ち、ヘーゲルが「一方では外的必然性であり……地方国家は……内的目的であり……」と言うとき

① 家族、社会の利害関係、法律は国家のそれに讓歩従属しており、現存においても国家に依存し、意志、法律においてもしかりである。「それらの『法律』や『利害関係』は、国家の『従属者』という状態にある。それらは国家への『依存性』のうちに生きて『従属』と『依存性』とが、外的な関係、すなわち自立的な本質を狭め、その本質に矛盾する関係であるまさにそのゆえに、『家族』や『市民社会』の国家に対する関係は、『外的必然』の関係、すなわち事物の内的本質に逆行する必然の関係なのである」

「即ち『市民社会や家族』が……その自立的な完全な発展においては、特殊な地域として国家に対して前提されるという理由によって、『従属』と『依存性』とは『外的な』強制的な、みせかけの同一性をしめしめておりその論理的表現として……「みせかけの必然性」という概念を用いたし、『ヘーゲル国法論批判』ME全集第一P 二三四」このヘーゲルの「外的必然性」——「みせかけの同一性」と同時に、「国家はそれらの地域の内的目的」としてあるとヘーゲルにあっては「理念が自立的な主体に転化されている」

「現実的理念、それは、その概念の二つの観念的領域である家族と市民社会に、すなわちその有限性の領域に自己自身を分割し……向自的(顕在的)に無限な現実的精神となる」(ヘーゲル)然し現実にはヘーゲルの顛倒行為としてある、「家族や市民社会を自己から区別し分離する理念の生活行程」なのでなく、家族、市民社会は、現実的な国家の部分であり、存在する仕方なのである。

「国家制度(憲法)は、国家の諸契機が抽象的に論理的なものに解消されうるかぎり、理性的である国家はその活動をその特別な本性にしたがってではなく、むしろ概念の本性、すなわち抽象的な思想の神秘化された動力にしたがって、区別し規定すべきなのだ、それゆえ国家制度の理性は抽象的論理学であって、国家概念ではない、国家制度の概念のかわりに、われわれは概念の制度を手に入れるのである、思想が国家の本性にしたがっているのではなくて、むしろ国家が出来合いの思想にしたがっているのである」と。

「ヘーゲル国法論(第二六一節—第三三節)の批判」に見るマルクスの主張は「外的必然性」「みせかけの同一性」「出来合いの思想に従う国家」として、即ち、「ドイツ・イデオロギー」において述べる「幻想的な共同性」として国家の本質を把握する、市民社会が集約された形態としての国家、何故にかかると「みせかけの同一性」「幻想的な共同性」として社会は集約されなければならないのか、エンゲルスはその著書「家族・私有財産及び国家の起源」の一八八四年版のための序文の中で次の様に述べる、「血族団体に基く古い社会は新たに発展した社会階級と衝突して粉碎され、その代りに国家に結成された、その単位はもはや血族団体ではなくて地域団体たる一つの新しい社会が、その中では家族秩序は全く財産秩序によって支配され、またその中では、今や、すべての従来の書かれた歴史の内容を成す階級対立及び階級斗争が自由に展開するところの一つの社会が出現するのである」

歴史的な追求はさておき、国家、行政権、代理人、そして市民社会との関連におけるマルクスの意見を聞こう。

② ヘーゲルは、行政権、警察権、司法権を同列においている。

「本来この『行政の代理人』「執行権」を持つ国家の官吏は市民社会の真の代理者ではなくて、かえって『市民社会』に對立する国家代表者なのである、この様にして国家と市民社会との對立は固定化させられている、国家は市民社会のうちにはなく外に居住し、この領域の内部における国家の管理が委任されている国家の代理人によってだけ、国家は市民社会と接触するのである」代理人は市民社会から国家を守る、ヘーゲルが組上げた最高の同一性は官吏の俸給、国家活動の官職への転化、保障されるのは代理人、↓位階秩序、官僚制、特権。

国家意識、公共的意識のヘーゲルにおける神秘化をマルクスは次の様に指摘する、「普遍的事項の形式的な現存あるいは経験的な現存は、その実体的現存から分離されている、このことの真理は、即目的にある普遍的な事項は現実的に普遍的ではなく、現実的に経験的な事項はたんに形式的である」と。

二重の主語、二つの領域規定、政治的、市民的。

③ 二つの領域規定は、血族団体から地域団体への転化をめぐるても重要である、エンゲルスにあっては、私有財産、国家において考察されている。

「完成した政治的国家は、その本質上、人間の類的生活であって、彼の物質的生活に對立している、この利己的な生活のいっさいの諸前提は、国家の領域の外に、市民社会の中に、しかも市民社会の特性として存続している、政治的国家が真に発達をとげたところでは、人間はただ思考や意識においてばかりでなく、現実において、生活において、天上と地上との二重生活を営む、一つは政治的共同体における生活であり、そのなかで人間は自分で自分を共同体的存在だと思っている、もう一つは市民社会における生活であって、そのなかでは人間は私人として活動し、他人を手段とみなし自分自身をも手段にまで下落させて、ほかの勢力の玩弄物となっている」(「ユダヤ人問題によせて」全集第一巻P 三九二)

国家の買収、「この国家は租税を通じて次第に私有者たちに買いとられ、国債制度を通じて完全にかれらの手におち」いつている。「『ドイツ・イデオロギー』2 所有に對する国家及び法の関係」これと同じ事は「ドイツ・イデオロギー」聖ブルーノ、および「聖マックスからの抄録(二十)ブルジョアジーによる国家の買収」を見よ。国家の本質規定そして、最近のスターリン的、もしくは、その延

長路線にある中国を筆頭とする国家論においては見られない幾つかの側面に対する解答は、市民社会そのものの解明とともに語られなければならない、それは、まさにマルクスが言うごとく、思想の変化の中に即ち、市民社会における利害関係とともに……  
「ヘーゲルに於ける『外的必然性』と『地域の内在的目的』とかこの様なものとして把握されよう。」

マルクスの二重の規定たる「国家」と「市民社会」や「家族」は、換言すれば、政治的共同体と共同体という表現により説明される。

⑩ これは「批判的論評」においてマルクスは用いている、(M E全集第一巻 四四四—四四五)

「労働者が孤立させられているこの共同体なるものは、政治的共同体とはまったく別の現実性と、まったく別の規模とをもった共同体である、労働者自身の労働によって彼らからきりはなされているこの共同体は、生活そのものである」「人間の本質である。人間の本質は真の共同体である、」、これから孤立する事は政治的共同体から孤立するより、全面的であり、「矛盾にみちたものである、」そしてマルクスは、それを蜂起の中でとらえる、即ち「産業上の蜂起は、どんなに部分的であっても、そのなかに普遍的精神をひそめており、政治的蜂起は、どんなに普遍的であっても、形はどれほどりっぱでも、そのかけに偏狭な精神をかくしているのだ」と。

⑪ 「プロイセン人」代の予言に対する批判としての主張である。

さて、最近、我々が多く見るところのマルクス主義(自称)者の国家観は、「本質規定」ぬきの、実体的な、あのレーニンの国家論の延長路線にあるか、それとも、その対極としての機能論的国家論への傾斜である。

## 史的唯物論

田原芳

I いま、我々は二十世紀中葉の日本にあつて、形式論理學を語らなければならないとは、何と氣はずかしい、何と悲劇的な、屈辱的な事ではないか。

かつてマルクスがブルードン批判において、經濟學を語りながらも形而上學を語らなければならなかつたごとく、我々は史的唯物論を語りながらも、形式論理學を語らなければならぬ。

日本の歴史學(比較歴史學)の頂点であり、戦後日本資本主義論争に於ける講座派理論のB・Bである、インテリゲンチヤ大塚久雄氏に対して、今我々は、その仕事に着手しなければならぬ。

我々が微弱なる能力と、狭い知識しかもちあわせていないとしても、現実の階級斗争を直視し、何が科学か検討しようとする我々であるがゆえに、あえてこの批判の仕事をなさねばならぬ。

大塚久雄氏の出版物が多くあろうとも、昭和三〇年から三六年まで、九刷発行がなされた「共同体の基礎理論」を批判の対象として選ばなければならない。

何故かは、歴史について一読されている諸君が周知のことである。

II この批判の仕事に着手する動機は、次の通りである。

(A) 我々が機関紙「烽火」No.1, No.2の「理論」でとりあげた構造的改良理論に於ける現代資本主義——国家独占資本主義——論批判が、国家論として展開されたが、第2号、三宅論文においても、それは

いわゆるスターリニズム批判を自らの思想のよりどころとするものは、多かれ、少なかれ、その論理を極点にまで発展させるとするならば、それは、自らその地場を反思想上の反立に出発させるものであるがゆえに、反立そのものの權威を感ずることだろう。

一・一五 (社学同同志支部「灰色の理論」1号、六二年)

季節6(特大号) 近刊 予価一、八〇〇円  
《特集》現代史における二つの安保闘争の意義  
「二つの安保」のスターリニズム的・機械的改進黨を批判し、「六〇年安保斗争とプロト」を以て思想的エッセイとして論議する。マルクス主義とプロト、学問斗争、改革斗争、破防法、労働者斗争、マルクス主義と広松理論、七一年の里塚斗争、革命斗争、まで全面的に総括を試みる。豊富な資料を駆使し、幻の文獻問題を解く。

エスエル出版会 西宮市小松南三、四、二八四〇—  
電話〇七九八—四九二〇六五

プラン論争における立場の相異ということ以上の掘り下げた追求はなされなかつた。我々がこれを押し進めるとすれば、我々が本論文をはじめとして、今後継続的にとり上げて行こうとする史的唯物論の分野の検討をぬきにしてはやれないからである。

構造的改良理論——今井論文——で見られた「二つの国家論」の特徴は、国家を生産関係として把握するところにあつた、第二次的、派生的生産関係としての国家の把握は、我々が、かつてプラン論争においても、一つの主要な対立点として見るところであつた。

「二つに分かいたされた国家」………、社会を把握する上で重要な意義を持つ国家に対する理解の相異は、資本主義論というよりも、むしろその根源を、史的唯物論における相異として求められなければならないのである。

(B) 一九六〇年の安保斗争の敗北以来、表面化した、共産主義者同盟の崩壊過程に於ける理論問題の一つとして、反スタ論(ソ連論)があつた。

この問題に於けるソ連での論争は、日本におけるそれとは異り、一九三〇年—三三年にかけて激烈に展開された史的唯物論をめぐってなされた。

社会経済的諸構成(これは生産関係の総体を意味する)のマルクス—レーニン主義的理論とは何か。

歴史及び封建主義——農奴制度並びに封建主義の一変種としての所謂「アジア的」生産様式に関する学説、そして又、農奴制、ソヴェト同盟における過渡期、その他の如き諸構成の是認、構成と構成の内部における段階の問題、東洋の独自性をヨーロッパ的な発展の型に対立させるか否か、と。

その様な論争が、現実のソ連政策とあわせられて提起されたので

あり、その一つの政治的結着としてミーチン、ラヴモフスキーの「史的唯物論」を見る事が出来る。

この様な論争過程を見ても、又理論的に言っても、「ソ連論」が、現在の様な変型したものととして——政治—政策—官僚制へと傾斜して行く袋小路の論争として——ではなく、正常な論争を展開しなければならぬ、現在のソ連論をめぐる論争は、子供じみたものではない。

② 反スタをその思想の動機とする先駆に見られる論の展開は、内容として興味をひくものがあるにせよ思想体系的に見るならば、それらは、国家観、階級観を前提とするものであり、我々との対立、相異もそこにあると言わねばならない。我々は、そこで、我々の主張をしなければならぬ。

Ⅲ 「共同体の基礎理論」を一貫としてつらぬいているものは、勝手気ままな、その場あたりの用語法である。

大塚久雄氏が「共同体」を論ずる以上、我々は、この概念を明らかにしなければならぬ。

大塚氏は、この書において「共同体」を次の様な用語法でつかう事を、序論(P4)で約束する。

(A) 「原始共同態」ursprünglich Gemeinenschaft  
との歴史的連関をもそのうちに含めながらいっそう広く、その後封建社会の終末にいたるまでの広範な期間にわたってつきつきに継続する生産様式——もちろん階級分裂をもそのうちにはらむ——の土台あるいは骨組を形成した『共同組織』Gemeinwesen全般を問題とするのである」と。

主語は「土台あるいは骨組を形成した共同組織」であるためこの

生産関係の積極的側面、土地の私的占取関係、消極的側面、内部編制の如何、共同組織。

① 「共同組織」は「経済外的な外枠である」

② 「共同組織」は、「共同体」とよばれる生産関係の「消極的側面」であること、

「共同体」と「共同組織」は次の様な関連にあることを暗々のうちに我々に公約している。「共同組織」は「原始的な経済外的な外枠」として、「共同体」とも、「共同態」とも異なる、より狭い、限定的規定がなされていることである。

「共同組織」が「経済外的な外枠」であるならば、④生産関係の「消極的側面」とは「外枠」なのか、一面で経済的、一面で外的として生産関係は規定されるものか、大塚久雄氏が、生産関係をいかなるものとして把握するのか、我々は疑問に思わざるを得ないのである。

我々のこの疑問に対して大塚氏は「土地の私的占取関係の如何」こそ本質的側面であると言いかも出来ない。然し、まったく完全に混乱している用語法は、ただ次の事を語っているにすぎない。

④に於いて「共同組織」は、「共同体」として広義に、⑤に於いて「共同組織」は、「原始的な経済外的な外枠」として、しかしして最悪の結論をくだすとすれば、「共同体」||「共同組織」||「経済外的な外枠」||「生産関係」であると。

△例を見ようV

P 6 「生産関係が共同体にはかならぬ」

P 32 「共同体とよばれる生産様式」

P 38 「共同体的外枠(=共同組織)」

P 38—39 「共同体とよばれる生産関係」「共同体とよばれる共同組

序論で明らかにされる「共同体の基礎理論」が明らかにしようとするものは「共同組織」である。ここで明らかなることは、

① 「共同体」を「共同組織」として規定している。

② 「共同組織」は、生産様式ではないこと、生産様式の土台あるいは骨組を形成したものである。

③ 共同体についても①を前提して同②であること。大塚久雄氏は②の中でこの共同組織は共同態、共同体、すべてに一般的にあたる規定である事を説明する。であるとするならば、ここに於いて氏が明らかにしようとする、又規定しようとする「共同体」は無規定であることは言うまでもない。

(B) 「土地の私的占取関係の如何は『共同体』とよばれる一定の生産関係の積極的な側面を形づくっている、……それに相応する基本共同態の推転及び『共同体』の内部的編制の如何(=とくに血縁関係の弛緩度)。およそ『共同体』が原始的な血縁共同態から系譜をひく一定の原始的な経済外的な外枠(=共同組織)をもち、これが『共同体』とよばれる生産関係のいわば消極的側面を形づくっている」

⑥ 読者諸君、この文章における「土地の私的占取関係」のかわりに「生産手段の私的所有」を「共同組織」のかわりに「国家」をおきかえてみたまえ、我々は構造的改良の「二つの国家論」を見るだろう。

二つの主語は、「私的占取関係の如何」と「内部編制の如何」である。

この文に於いて我々は次の事が約束されたことを知らねばならぬ。「共同体」の二つの側面——積極的と消極的——それは又同時に生産関係の二側面としてである。

### 織

P 39 「共同体自体(=共同組織)」

P 39 「再生産構造としての共同体」

そして我々が検討した点としては、

④ 1 「共同体」||「共同組織」広義。

2 「共同組織」は生産様式ではないこと。

⑤ 1 生産関係の消極的側面としての共同組織。

2 「一定の原始的な経済外的な外枠(=共同組織)」

この用語法こそ、大塚史学を支えているものである、あのわかりにくい理論として、現実の歴史は、よりあつめられ並べられた歴史にすりかえられて行く、「共同体」は、①経済学そのものとして②経済外的な外枠として、用いられていることを我々は見た。

### 経済

④再生産構造としての共同体、④共同体的外枠(=共同組織)、⑤生産様式としての共同体、⑤共同体自体(=共同組織)、⑥生産関係としての共同体、⑥共同組織は共同体

それ故に大塚氏にあっては、経済的カテゴリーとしての共同体は、同時に経済的カテゴリーとして無条件に規定されている、それ故に我々は、大塚氏の用語及び用語法を否定しなければならぬ。

大塚久雄先生が「共同体の基礎理論」で明らかにしようとする「共同体」なるものは、その用語法の段階で、すでにこの混乱を内包しているものであり、一見弁証法的用語法に見えるもの、それは単なる混乱法であり、用語法に於ける形式論理学の足もとにもおよびない。

又それは無数にくり返されるあのスピノザの命題

『Peter Munio est Negatio』  
同義反復無規定、無条件、そして不可避的におちいる二律背反、この用語法に於ける主張こそ、大塚久雄氏の最も誇りとするところであろう。

IV 大塚氏が「富」の包括的な基盤ともいへべき「土地」こそが、他ならぬ「共同体」がまさにそれによって成立するところの物質的基盤となる（第二章「共同体とその物質的基盤」土地、三「P 8」と言うとき、共同体の物質的基盤として、そして又、富の包括的基盤として「土地」を位置づける、主語は「土地」である、  
「共同体」がまさにそれによって成立するところの」と言うとき、「それ」とは、「土地」をさしているものと言わざるを得ない、

であるものとするならば、「共同体」はまさに土地によって成立するということは、換言すれば「土地」は「共同体」の前提として、必要不可分のものとして、即ち、これ（土地）なくしては「共同体」はあり得ないものとして大塚久雄氏は考えている、その事は単に、この文面において明らかばかりでなく、「共同体の基礎理論」の第二章として、何故に「共同体とその物質的基盤」土地を設定しなければならなかったか？ 大塚氏の心中を察するならば、先にあげた土地の評価以外にはありえないと思われるのである、そうである以上、我々は、大塚氏が共同体の前提として土地を位置づけているものと思わねばならない。

①「それ」「基盤」これらがくせものだ、

②然し我々はマルクスの書に、これとまるで逆の説明を見る。

「土地所有の第一の形態に於いて、——まず自然発生的な共同体

りである。

大塚氏も「土地」とは無関係に「共同体」で、マルクスのいんようをもつてその事を確認するとしても、論理からして、又、論文構成からするならば、それは氏の論とは無関連な言いわけであると言わねばならない。

「そうした形態上の段階的相違はあるにしても、社会関係の基本が「共同体」の形態をとっている限り、その根底には、ともかくつねに原始的な共同態が、何らかの形の「共同組織」として生きのびており、その集団性の二つは基本的な外枠を形づくっていると云わねばならない。」

と云うとき、「原始共同態」は拡大された規定をもつのである。即ち三つの基本形態としてある共同体は、原始共同態的共同組織を持つものであると、ところが、この「原始共同態」とは原始的集団性ないし、血縁組織であると言う。

然し、エンゲルスは次の様に言っている。

「血縁団体に基く古い社会は、新たに発展した社会階級と衝突して粉碎され、その代りに国家に結成された」と、それは古い血縁的種族と区別して今や地域種族へと転化したところの社会的関連としてある、それ故にこそ我々は「国家」の発生を見るのである。この転化はエンゲルスにあってはアテネ、ローマの三つの主要な形態において述べている（家族私有財産及び国家の起源）、共同体で見るとは古典古代的形態の時代である。

大塚氏の先の意見に従うならば、すでに古典古代形態以前に、即ち、「国家」の発生に先行する形態の中で論じなければならぬことになるのではないだろうか。

が第一の前提としてあらわれる、家族種族の形でひろがった家族、または諸家族間の相互の婚姻によってひろがった家族、または諸種族の結合、牧人生活一般には、生存様式の最初の形態であり、……種族共同体自然的共同体は、土地の集団的な占取（一時的な）の利用の結果としてではなく、前提としてあらわれる」と。（「諸形態」より）

我々は「共同体」と「土地」との関連において、大塚理論の顛倒を見るのである。大塚史学のこの誤りは何故に起るのかは、「原始共产制社会」の分析がないか、不明確であるからであると見なければならぬ。（この点については後日充分なる検討を加えるであろう）

②我々は「富」の規定においても誤りを見る、それは、大塚氏が次の様に述べるとき、更に明確である、

「貨幣が、まさしく宝庫としての「土地」の欠けたるを補うものとして現われるようになり、こうして「土地」の補点物として「貨幣」の堆積が形づくられるようになってくる」（P 16）と、

太陽神にもまげずおとらずの全能の「土地」、然し我々は貨幣論をかように見たことがあつたらうか。

③我々は労働手段についても同じことを見る。

「大地は人間に独自の、全く独自の生活過程たる生産過程（労働過程）に対してそのために必要な原始的な客観的諸条件（原始的生産手段）の堆積という意味をもおびて現われるからである。」それが原始的であるかいかかわらず、生産手段を規定することはしない。

果して大塚氏は史的唯物論を論じているのか、自然経済の段階の生存様式は、土地を基盤とするものではなかったし、共同体もしか

V 史的唯物論における歴史は、まごうことのない人間の歴史である。歴史の主体はつねに人類であり、客体はいつでも自然である。

新世代第三紀における哺乳動物の繁栄をへて、第三紀終りに発生したと言われる人間、自然の所産としての人間は、自ら自然であると同時に、自然界の他のすべてのものと異なる存在物として、自然に主体的に働きかけ、自然的環境を変化せしめて来た人間は、自らの生命の維持と共に、人類の生命の維持をしなければならぬ。それは他の全ての生物についても言えることなのである。

個体の維持と種族の維持は、かの単細胞動物にあっては、直接的統一的である、然しそれがより高とう動物においては、生殖機能と栄養機能の分離された形態で与えられているのであって、それ由に又、この栄養行為と生殖行為は、相互に媒介的否定関係にあると言わねばならない。

この自立化した対立機能、行為としての両者はしかしながら生殖機能に対し、栄養機能は規定的推進力としての位置をもって対立しているのである。であるが故に、エンゲルスも又次の様に述べるのである。

「歴史に於ける決定的契機は、直接的生命の生産及び再生産である、この直接的生命の生産及び再生産は、それ自体二種類に分れる、一方では、生活資料、即ち衣食住の対象の生産及びそれに必要な道具の生産、他方では人間自身の生産、種属の繁栄」であると。

①①についてはエンゲルスはヨゼフプロツホへの手紙においては、「現実的生活の生産及び再生産」といっている。邦訳白揚社その他。

②については、マルクスは「ドイツ・イデオロギー、歴史」において述べ、エンゲルスは「反デューリング論」において同じことを述べている。

この点についてのア・ボグターノフ、又はフロイドの主張は、研究せよ。

我々はこの自立した二つの機能の対立関係についての実例を動物社会における交尾期に典型的に見る事が出来るのである。

エンゲルスは又次の様に言っている。

「成長した雄の相互の忍耐嫉妬からの解放は、その中においての動物の人間化が行なわれたような比較的大きく且つ継続的な群の形成のための第一の条件であった」

「群団の共同感情の最大の敵は家族の共同感情に外ならぬ」と。

原始時代における集団的な直立猿人社会にとってこの対立関係が止揚されることは極めて重要であった。その事は歴史的には群婚という婚姻形態によってなされたのである。群婚初期の（文化段階で言うならば、野蛮の下段及び中段のはじめにおける）血縁家族としてあったのである。家族の第一段階であるこの血縁家族は、世代によって区分された三つの集団によって構成されている。（オーストラリア人に史実を見る）

血縁家族は、群婚の後期、即ち野蛮の中段から上段において最高にたつする、原始的氏族の典型的形態としてのブナリア族に至る。（ポリネシア人、アメリカ西北部インデアン、コロンビア河流域における種族、その他）

この野蛮の段階における経済が自然経済であったことは言うまでもない。

群居集団の血縁家族（親族集団）への転化は、人間の生産的労働

にも大きく変化をもたらすのである。

この様な家族は「はじめは唯一の社会的関係であるが」とマルクスが言うとき、この社会的関係は、直接的生命の生産及び再生産としての一形態であるにせよ、それはいまだ性交上の問題としてのみあったことはうたがいない。それは当然人類の繁栄という目的のもとに（マルクスに従えば欲望）止揚されなければならない。

以上のごとき親族制度は、生産的労働に新しい規則をあたえる、親族制度は性交上のつながりとしての社会的関係であると同時に、生産関係の総体としての社会的経済構成でなければならぬのである。

生産関係は、まさに先に述べた人間集団の転化形態のうちに発生するのである。

④ この時代、人間社会における最初の生産関係は、マルクスが言うごとく物化された人間としての特殊な生産物としての生産手段を中心とするよりも、むしろ、人間そのものを中心としてのみ、生産関係は構成されたものらしい。

親族制度の発生は、先に見たごとき過程をたどってなされたし、その基礎は、生産関係や、経済関係ではなかった。然し我々は、この最初の社会的関係としての親族制度に、最初の生産関係の形態を見つけないければならないか、即ち生産関係の総体としての社会的経済構成の第一段を求め。

VI 我々は大家氏が強調するところの「原始共産態」なるものがいかなるものかにかんして発生したか、又その制度についての若干の考察を試みた。

⑤ この問題についての検討は更に掘り下げた追求を必要とする

ものである。我々はエンゲルスの検討をもあわせて研究すべきであろう。

かくて我々は再度「共同体の基礎理論」に帰らなければならない。大家久雄氏の諸規定がいかになされているのか「封建的生産様式の崩壊、他面から言えば資本主義的生産様式の発生という変革点の境として」、前者は「いずれも根底において共同体」として編制され、後者は「共同体の構成を全く欠いている。」そして共同体があるかないかは、「当面経済史の発展にとって、きわめて重要な意味を持っている。」と、これが「共同体の基礎理論」を書いた大家氏の眼点であると思われる。

ところがここでは「共同体」とはいかなるものかは明らかではない。

そこで我々はⅢ A、Bをととして「共同体」規定を見た。

そこで我々は共同体Ⅱ共同組織を見たのであるが、ここで我々はふたたび共同組織を中心として大家氏の用語法を研究してみよう。

- ① 無階級の原始共同組織という意味での「原始共同体」P 4
- ② 共同組織Ⅱ共同体、P 4
- ③ 共同組織としての外枠にほめこまれてP 7
- ④ 原始共同態Ⅱ共同組織 P 19、
- ⑤ 共同組織を根底にもつ社会関係こそが共同体
- ⑥ その様な共同組織（マルクス「資本制生産に先行する諸形態」種類共同態、即ち自然的な共同組織——これについてはⅥにおいて我々も見したが、血縁家族もしくはブナリア族をさすものらしい。それ由、ここでは共同組織Ⅱ家族形態もしくは親族制度）P 19、

- ⑦ 原始的な血縁的共同組織が、農業共同体へと集展する、(何が？それは不明)
- ⑧ 共同体の外枠Ⅱ共同組織、
- ⑨ 共同体自体Ⅱ共同組織、
- ⑩ 経済的外枠Ⅱ共同組織

無規定的であるが、良心的に大家氏が言わんとする共同組織を解釈するならば、婚姻形態、家族形態を言うらしい。

であるとするれば、我々が先に見たごとく、国家の発生とともに、それにとってかわられる。

であるとするれば、氏が夢みるところの「それぞれの段階に於いて、基本共同態は、種族—都市—村落、というコースで上向的な推転をとげる」ことはなく、「種族—古代都市国家—封建国家」へと進むものとしか考えられない、エンゲルスの構想もこの様であった様に思われるのである。

⑥ アジアの形態、それに対応するところのアジアの古代専制君主制国家の問題については、マルクス、エンゲルスにおいては明確に説明されていない。我々はこれについては、「ア—リアン人」の研究とあわせて追求しているし、後日詳しく述べるとしてここでは一応はおく事とする。

階級対立の表面化、国家の発生ともあわせ極めて重要であることを注目されたい。

先に見て来た大家氏の弱点と誤りは、第三章「共同体と土地占取の諸形態」〔古典古代的形態〕において明確に現われざるを得ないのである。

「旧い血縁による原始的紐帯の意味はすでに基本的に失われている

た、とはいえ共同体は……なお「共同労働としての戦斗」によって占取され、防衛されるものの「公有地」としてうつしみの姿をとって存在していた「共同労働としての戦斗」を通じて少なくともその云わば半身を「共同体」自体のうちになお深く没入せしめていたということができようと思う」(P七四—七五)

何という涙ぐましい努力ではないか、然し我々は、ここに決定的な大塚氏の誤りを指摘しなければならない、即ち「血縁組織」はすでに「共同労働としての戦斗」にすりかえられている。

この時代の「戦斗」は、我々が、かのコーカサス中央アジア及びヨーロッパの若干の地方に残存している様な、大家族の同盟による氏族的共同体をつくっていた時代の「血の復讐」と同一視することが出来るのか、大塚氏の指摘は、まさにぎまんではないのである。

一方においては、いやいやながら血縁的種族の地域的種族の転化を、国家の発生を認めなければならぬ。

### VII 今尚、講座派理論の中心として、日本歴史学を君臨している

大塚史学は、いかに非科学的用語法のもとに、私弁を弄しつつあるかを我々は見て来た。

この仕事は今後より系統的に全面的にとりくまねばならないものである。

大塚史学批判を我々はこの用語法の批判をはじめなければならない。

マルクス主義的言語で語るブルジョア理論、思想こそが最も危険である。

この小論文で私が提起しようとした三つの問題点は次の通りである。

る。

- ① 人間社会の発生、原始共产制社会の把握の対立をめぐる、それは、社会変革の思想的対立と極めて密着している

(カウツキー、クレイ、クリチエフスキーその他)

- ② 最近ソ連における家族論争(マカレンコの再評価)

階級、国家の派生、エンゲルスの「フランク時代」(選集16巻)

アジア的形態の解明、ソ連論への我々の接近を含む、

- ③ 「家族私有財産及び国家の起源」のしゅうせい発展への試み。

それは又マルクスの「資本論」「ヴェーラ・ザスリツチ宛の手紙」

エンゲルスのそれ、我々は解答を出さねばならない。

史的唯物論の重要性の強張である。一九三三年以降、停滞している現代の問題を視点をここにふりむけることに努力しなければならない。

(社会学同志社支部『灰色の理論』No. 2、六二年一月二三日)

### 反黒田寛一論

#### 社会主義学生同盟同志社支部

#### 学生運動に於て — 共産主義者同盟の解体から

##### 安保以後—二七中委—一七回大会以前

爆発的なエネルギーによって展開された、安保闘争は、事後に於て幾多の問題を我々の面前に投げかけている。

それは唯単なる前衛不在を叫ぶ事によっても解決されえないし、又ある闘争を責任をもって推進して来た部分が全くの妨主さんげをする事によって旧来の欠陥を革命的に止揚したのだと云って自己満足する事も出来ない。

強烈に激動する現実、その様な空論や無実体なものには、何らの存在基盤を与えていない。勿論、我々は、批判及び自己批判、そして、その有機的実体化の過程を絶対に一刻たりとも怠ってはならない。

しかし、それが全くの非難中傷や、自己を没却したところのザンゲからは、新たな発展のエネルギーを見出す事は出来ない。つまり、批判は、非難中傷であってはならず、又第三者的批判であってはならない。なぜなら、それらは全て、非実践的なもの絶えずさがしている態度である。

それらの客観的影響に対しても何らの責任を持ってない者にのみ出来る極めて拙劣な軽度だからである。

又、自己批判は、自己没却的自己批判であってはならず、自己偽瞞であってはならない。それは、激烈に流動したあの闘いの中に、

生々しい現実の中に自己の存在基盤を持っているものみに許される態度である。

「息づまる現実と革命運動の矛盾と苦悩の中からそれとの死闘の過程から」(香山健一、現代思想)創出されたものである事を知らなければならない。これは苦悩と激動に満ちた実践の過程を経て来

た者のみに与えられた有意義な苦痛であり、光輝ある特権である。

× × × × ×

我々は、この様な客観状態に於いて現在の全民主勢力の一端に課せられた問題にスポットを当てなければならない。云うなれば、それは、闘う主体組織の早急なる確立である。それは、一枚岩の排外的な統一と団結論では解明され得ないし、又、全く組織原則を無視した無責任な理解闘争によって解決されえない。

安保闘争以降、あの闘争の全過程を最も先鋭的に闘いそして、それによって決定的な打撃を受けた全学連、わけても、実質的に指導した共産主義者同盟のたどった現在までの過程は、現在我々が当面している全学連再建の問題ときわめて密接な関係がある。

共産主義者同盟の分派闘争の発端は、東大細胞意見書によってであった。これ以後「革命の通達」を機関紙として、本来的に共産主義者同盟が内包していた否定的側面である「極左」的方向をより純粋化したものである。その立論は、全くの希望的観測のみに依拠した情勢分析にあった。そこには唯物弁証法の認識論は全く欠除していた。現実事物の一面的現象的外部的な関係は、真に感性的な認識の段階であって、この段階で止り既に結論を持って来たのが革通派といわれる実に勇ましい諸君であったと思われる。我々は、この認識の段階を更に推し進めて、事物の全体本質内部的連関に達し、それが相互関連の下に内在的矛盾を暴露し、周囲の世界の発展をも

たらずものにしなければならぬ。

勿論その事は、我々全学連が過去に於て犯した、情勢に於ける客観主義と方針に於ける主観主義を一方たりとも弁護するものであってはならない。

かの勇ましい諸君は、次の様な凶式を全く憶りもなく展開する。つまり「六・一八がそうした課題を明確にかけ再度国会突入を勝ち取り、暴動的事態のうらに政治危機を現出していたならば、↓池田阻止 ↓ブルジョアジーの譲歩 ↓彼らは生死をかけた取捨策に没頭 ↓経済危機 ↓日本革命(?)」

実にすばらしい革命を通過している事だろう。現代革命の理論はこんなに安く買えるもののだろうか。でも売れ行きはよくなかった。

次に「我々全人民の武装蜂起を準備し実行する」事を日本プロレタリアートに傳達する「プロレタリア通信派」の諸君と、そして又これ又勇ましい「戦旗」をかかえて「前衛党の建設」をさげぶ「戦旗派」の諸君の出現を知らされた。

特にこの中で「戦旗派」は、現在全学連指導部を全く私物化しているマル学同へ全体的に合流して行った点に留意すべきである。

最初に確認したように、このブントの分派闘争、解体の中から我々は何らかの教訓を引き出さねばならない。解体の原因を若干述べるとすれば、一つには、「池田内閣が展開する新たな情勢の局面に対応した方針を何ら具体的に示し得ず階級闘争の指導部として全く無能」であった事。

第二には「全国的政治組織を与えるだけの権威が全く喪失」していた事である。

これは、いきおいの無原則的な分派闘争が更に一段と事態を悪

るといふものだ。

ブントの崩壊過程で、勢力を拡大したマル学同は、四月の二七中委に於て中執を教の上で握り反帝反スタの学生運動を提唱した。

その内容とは何か。

「27中委によって切り開かれた革命的學生運動の方向及び、四月六月闘争に於けるその端緒的形成の上に立って、反帝反スタ学生主義學生運動の原則を確立することではなければならない。27中委が過去に於ける左翼スタ学生主義的學生運動に対する断罪の場であったとするならば、今次大会は、我々の主張する全面的展開・開花の場たらしめねばならない。」と。

つまり、ここで、マル学同の実態は、反帝反スタ以外の何ものでもない事は明白になった。激烈な宣伝的言辭に対する批判は一応おくとして「四一六月闘争に於ける端緒的形成」とは、実に奇妙なひびきを発しているではないか。

なぜなら、我々が京都を中心に政暴法をぶつぶす為に果敢に闘っている間に、東京に於て、黒寛の奇妙によって催眠術にかかり、昼寝していたのは、彼らではなかったのか。

次に「左翼スタ学生主義學生運動に対する断罪の場」であると。これは、まさに小ブントである。過去に於て犯したブントの誤り、固定化・絶対化・物神化したところのスタ学生主義に対する憎しみのあまり遂に彼ら自身が、スタ学生主義と同じ思考に基づいて反スタ学生主義をかかげた。反スタ学生主義が出発であり、すべてがその範囲内で自己回転。

我々は、ここでマルクスの言葉をきこう。「私はマルクス主義者ではない。」と。

スタ学生主義の果たした役割は、人間主義に根ざしたマルクス主義

化させた事は、十分うなずける。この事態に対処する為に前記の三派によって展開された事柄は大きくいて、一つは階級間の力関係を完全に無視した主観主義的方针である「万年決戦論」と第二は、前衛不在 ↓党建設と云う論理構成との対決であった。

これらの非生産的な紛争から、我々の導き出した教訓は、第一に社会主義運動即共産主義運動は情勢の新たな局面に対応するものではない限り、前進するものではない。つまり自己の理論に権威を与える為にむやみやたらに、断片的なマルクス・レーニン・トロツキの理論によって粉飾をこらそうとも、それらは綿密な科学的情勢分析に基いたものでなければならぬかの有効性を持ち得ないと云う事である。

第二は、「學生運動の延長上に党を作る」という理論の破産が明白になった事である。これも又、全くの主観主義で現在生けるしかばねと化したマル学同の諸君も、これを克服するどころか別の形で拡大再生産している現実を見よ。

現在の學生運動を論ずる場合、当然、物質的に大きなものを占めて外部に絶えず書をふりまいている全口連の動きを無視する事は出来ないが、これは他の機会に論ずる。

### マル学同の実態分析——観念のもたえ全学連二七中委—— 一七回大会

安保闘争の過程に於て若干存在していたマル学同(早大一文等)は、何ら闘争を実質に組まなかった。

非生産的に分派闘争に浮き身をやつしていた戦旗派のかなりの部分分がマル学同の奇妙な魔術に幻惑された。

これは、しよせん、民・民・民と同様夏の間だけの命であるのだが、かかる害虫は、徹底的に除去しておいた方が、よい野菜は多くとれ

ニン主義のエッセンスを、全くの革命的技術論にまで転落させ卑俗化させた事である。力強く躍動しつづけた人間マルクス、人間レーニンの思想を神秘化し、形ガイ化し、ミイラ化した事であった。

このスタ学生主義に対して、同じものの裏がえしであるクロカニズムが対立しようというのだ。仲々ちょっととした見物ではないか。しかし、實に於て同じなら、この勝負のカギはどうやら物量が握っているようだ。

黒田氏は、自己変革による主体性の確立を叫んでいる。なるほど、それは結構なことだ。でも、その確立の過程は、どうなのだろうか。彼は云っている。「闘争に於ける最後の敗北よりも、その闘争に参加した、一個人が自己に自己変革をなすとけて行くかに重要性があるのだ。」と。

つまり彼らには、現在という生々しい感覚は働かないのだ。そこには現代の国家独占資本主義下に於ける綿密な政治分析もなければ経済分析もない。そして又、それに根ざした運動論を見出す事も出来ない。

このような状態で、前衛党の確立をさげこんでいるのだ。真に狂気ざたである。

この現実の闘争の過程に於て、生々しい苦痛に満ちた大衆運動を組織して行く労をいとわずして、つまり現実に適応した組織論なくして、どうして前衛党の確立が達成されよう。この様な事が出来たら真に20世紀に於ける一大キセキである。

では又、問題の議案にもどう。ここで問題にしなくてはならないのは、學生運動としての特殊性と労働階級を指導するところの前衛党の問題を混同してはならないと云うことである。

敵を誤っては勝てませんよ!!

これについての議案は、更に述べている。

「第一に学生自治会を基礎とした学生大衆運動としての学生運動自体としての問題と第二に、革命的左翼の運動として現実のプロレタリアートの闘争にいかにかかわり、これを如何に変革して行つていこうとしたかと云う問題、この区別と同一性に於て、明確にとらえ追求しなければならぬことである。」更に「『学生運動としては正しかったが革命的左翼の闘争としては誤りであった』(etic) 或いは『プロレタリア運動⇨革命運動の視点からする位置づけが欠如していたが故に誤つたのだ』等々の形での批判で二重うつしにされてはならない。」と。

我々は、ここで二、三注意しなければならぬのは、「区別と同一性に於て」という表現を彼らを使う時には、「同一性」と解釈する方がより彼らの実体そのものをついている。つまり、ちりりほらりと耳にするところの「前衛を創つた後に大衆運動を」という彼らの全く逆転した論理の展開がされている事を知っているからだ。

又、後半の部分に於いて「革命的運動の視点からする位置づけが欠如した。」これはしたり、彼等自身が前衛不在を絶叫し、主体的喪失を叫び全てをこれの確立に還元しようとしているのではないか。全くの自己矛盾である。よもや前衛は、天から降って来るとも思っているのではあるまい。

更に用意周到な彼らは、恥を忍んで議案の中に次の項目をもうけている。

つまり「四、二、三の問題に対する反動的反発への我々の解答」である。この中から二、三の問題を拾ってみよう。

「①全自連打倒を行動方針の第一にかかげた事について」「我々が27中委に於いて行動方針に全自連打倒を提起した事は、帝国主義打倒という小ブル・ユートピアを骨のずいまで信じていた諸君には晴天のへきれきだったろう。ところがこのスローガンは全く正しい。なぜなら、学生運動を大衆的デモに矮小化する事に反対だ」と。ここに明確になる事は、反スタを反帝に優先させたことである。

大衆闘争がわずらわしくなった彼らは、こっそりと自己の立場を正当化する。しかしそれは、全く逆効果である。

それから更に、彼らの言葉を付け加えるならば、全自連⇨スターリニストを粉砕する為には、「場合によってはデモの組織によってこのエネルギーを注いで」「反帝反スタの思想と理論、行動と組織によってプロレタリア的組織を」作り出さねばならなかった、とのおべていることである。

次に彼等自身の設定している問題は、「政暴法闘争に於ける我々の若干の立ち遅れをさわざたてて、政暴法闘争に於て、我々が帝国主義打倒の、スターリン主義打倒の闘いを原則的に展開している事の意義を否定しようとする反動的反発」と述べている。

全くおわらいである。全都学連三百人のデモを、ごてごてしたけし、ようで分厚く見せかけようと全く涙ぐましい努力である。

「実践での日和見は、事実インペイで、それでもたならなければ、ささやかな自己批判で」だ!

彼らは、しゅせん、停滞期を自己の基盤とするものであり、再びめぐりくる激動には、黒寛とそのシッポにくらいつく数十人の信者達におちぶれる事は明々白々である。四月から始まる闘争ではマル同は、再び我々の後からついて来る、あわれなタクハツ坊主となりさがるだろう。

(『紙の弾丸』14—15号、六二年一月)